

## 新刊紹介

### 梯明秀著「物質の哲學的概念」

既に學生生活に於て、現下社會の諸矛盾を痛切に體驗せる著者がその解決の唯一の道なマルキシズムに見出し、爾來哲學をレーニン的段階に高めんとする努力が今發展の一段階を遂げ、此處に過去三ヶ年にわたるその勞作が一書に編まれ「物質の哲學的概念」と題されて發刊された。

その表題が示す如く本書の主要課題は物質の哲學的概念に相異なるが、その内容は單なる哲學書でなく著者の主觀的意念に依つて貫かれた、所謂ブルジョア社會學並びに哲學、自然科學一般の批判である。随つてその論策は各方面に及び諸種理論が攝取批判せられ、それに依つて同時に自己の立場を主張し、更にその中に著者自身への課題も見出すことに依つて今後の研究の發展をも期せんとする自他への眞摯なる批判的精神が本書を一貫する叙述態度と言はれよう。それ故に本書に編まれた主要論文は批判、課題、解決への道が、物質の概念解明の意圖の下に相交又して哲學的工作の一の發展過程を示してゐる。

本書は第一部「物質過程」第二部「イデオロギー批判」に分けられてゐるが、第一部に含まれた五つの論文が本書の骨格的內容をなすものである。しかもその第一の論文(緒論)「社會の起原の問題」に於て吾々は著者の大體の立場、意向を知ることが出来ると思はれる。此處では社會起原の問題が、即ち社會學方法論に於ける問題そのもの、原理的意義が問題とされるのである。社會は先づ此處で物質として規定される、此の物質の客觀的存在(意識なき自然そのもの)は著者にとつて疑ふ可からざるものであり、それの「人間意識への反映」がレーニンに従つて「物質の哲學的概念」と呼ばれる。その具體的諸規定は自然科學的概念そのものとされ、その唯一重要な規定は「運動」である。「運動は物質と共にあり嚴密には物質の存在形式である。」扱て、此の運動一般の特殊化の過程(物質の形態轉換の過程)が自然辯證法であり、それ故にその運動が歴史的過程そのものに外ならない。此處で物質の形態轉換の過程としての全自然史的過程に於ける物質相互の動的聯關の抽象的形式、即ち客觀的カテゴリーとしての因果性、本來の意味の歴史的因果律——此概念こそ著者が各論を通じて強調する所のものである——が自然辯證法の中樞概念として論ぜられる。此處に注意す可きは「物質、生命、意識とは自然の辯證法的過程の三つの歴史的發展段階としての物體、生物、社會の各々夫々個有な本質的性格に過ぎぬ」のである。さて、此の物質そのものに於ける内在的矛盾が吾々の言ふ「問題」なるが故にその問題の解決は特殊の形態を構成する物質的諸條件の發展過程の中にかくされてゐると言はれ、此の意味に於て「社會の起原の問題とは宇宙の自然史的過程に於て社會が——それ自らは依然として自然でありながら——爾餘の自然から質的に區別するに至つた所の自然の自己

轉化過程としての自然的綜合に依る結節(「社會」)を解く可き課題そのものであり従つて社會の分析の方法として、社會學方法論の原理的意義を持つものとしてこの問題を問題にせねばならぬ。」と。かくて、社會の起原の問題は自然と社會との辯證法的過程と言ふ問題と同一視せられる。斯かる見地に於ては社會の辯證法は自然の辯證法の一形態であり、その自然の社會への轉化は自然物としての人間が自然物としての勞働對象との對立を勞働過程(自然過程)に於て統一する所に生ずるのであり、この轉化が一定の先行社會條件の下に行はれる限りそれは社會過程であり、同時に生産過程でもある、此處に見られるかゝる生産的有機體としての社會は人間をも自らの中の一契機とする點で生物有機體とは質的に異なるものであり、この質的に異なる生物と社會が自然史的過程に於ける二つの特殊形態として詳論され、しかもその過程の類似性がその基礎としての特殊に現實的關聯をもつ普遍的な本質的統一性の表現として規定せられる。かくて研究法としては、マルクスの資本論に於て遂行した方法は直ちに生物學に於いて遂行す可き研究法とされる。

次に、第一章「物質一般」に於ては「歴史と自然辯證法」と題されて緒論に述べられた物質の概念の一層具體的な規定が試みられる。物質の概念(唯物論の第一原理)は自由なる存在のことである。即ち自由と存在の矛盾的統一としての高次の概念なのである。それは無でもなければ又單なる有でもなくそれ自ら過程として無と有の統一である。此の過程即ち客體的な自然の動性が歴史的自然

であつた。所謂歴史的自覺とはその過程性に立つて靜止的自然像(法則の體系としての科學的自然)を過程的に把握しその本來の動性の爲にこれを破壊すると言ふ變革的實踐でありそれが吾々に眞の自由を「高次の非在たる物質性」を與へるのである。此處に言はれる實踐が個人の「抽象的な行爲」でない事は注意する可きである。歴史は特殊的全體としての階級を道して運動するのである。著者の意味する哲學的物質とは自然そのもの、この辯證法的自己運動である。「意識なき自然としての物質一般即ち物理的自然の歴史の把握これこそがエンゲルスの自然辯證法であつた。」かくて物理的自然が物質本來の過程性に恢復される所に物理學的自然の具體的な客觀的認識が成立するとの見地より物理學的認識に於ける危機の問題が検討され同時に斯かる物質概念が如何なる程度に物理學界の現實問題に對して解決力を持つかが論究せられる。しかして物理學のみならず、並びに生物學に關する限り著者は辯證法的精神の自覺を物理學者並びに生物學者に對し要請する。著者に依れば唯物論的世界觀のみが物理學者、生物學者の實踐を原理的に指導し得るのである。

斯くて第二章「生活物質」に於ては「生物的な可能性」「生物學に於けるダーザイン的課題」なる二論文に於て唯物論的生物學の爲の論究がなされてゐる。第一の論文に於ては生物界の形式的見方の典型としてカントの批判に依つてその「因果の手段性」が指摘され、それ故に其處に扱はれる因果性と目的性とが辯證法的に統一され得ず、即ち歴史的因果律の概念に依つて具體的因果

關係となり得ず、單に外的機械的結合に終らざるを得なかつたとされてゐる。著者は此處で辯證法的判斷力を根據とすることに依つて因果性と目的性との統一に於ける生物的自然的可能を信するのである。物理的自然は生物的自然の一般性としてあるが故に、所謂形式的合目的性は承認せられねばならず、たゞ此處ではそれが方法論的要請とされるものが拒まれてゐるのである。かくてカントに於ける絶對的なものは相對化され過程化され、相對的合目的性を絶對的因果性に止揚すると云ふ辯證法的課題、即ち次の論文「生物學に於けるダーウインの課題」の解決が可能となる。此の論文に於ては隨つて自然史的概念は如何にして可能かの課題が論じられ、自然の歴史の概念が唯物論的に建築されてゐる。

扱て、第三章「社會物質」に於ては、以上に依つて物質としての社會の原理が生産なるを知り、自然史的概念が確立され得るを知つた著者は生産が歴史の範疇なるを知り、續いてその生産が特殊化的轉化を遂げたものとしての社會物質たる資本が歴史の範疇として概念さる可き確證を得、斯かる問題が、「歴史の範疇としての資本」なる論題の下に、フランス社會學批判を手引きとして論究されてゐる。「歴史は資本の内在的矛盾の發展過程そのものである。」此の矛盾は現實に於ては社會問題として把握されるが、實は歴史を決定する矛盾であるが故に原理的には歴史の問題と言はねばならぬとの考への下に此處では社會問題は歴史問題として封建主義經濟と資本主義經濟、ブルジョアとプロレタリアート等の關係が史的解釋を通じて論究されてゐる。

以上は本書、第一部構成の道筋であるが、更に第二部に於て、第一部に論ぜられたる著者の立場よりして「イデオロギー批判」がなされる。その内容をなす項目は次の様である。

「イデオロギー批判」イデオロギーとしてのアカデミズムと「イデオロギー」イデオロギーとしてのアカデミズムの構造に就いて」「新聞的と雜誌的」

時評と紹介（「生物學に於けるフッシュム」「哲學時評」）「哲學時評」(「論壇時評」(「論壇から理論戦線へ」)

イデオロギー批判「三木哲學のフッシュムの形態」

以上の内容に於て著者は對質す可き限りの理論を詳細に批判せんと企て、ゐる。勿論、第一部第二部を通じて著者にとつて批判の關心が同時に建築の關心であつたことは言ふ迄もない。自然の唯物論的把握如何の建築的努力が、本書の底か流れるものであらう。

扱て、此の中心課題たる自然の唯物論的把握の基礎的役割を果す模寫說究明の餘地を尙本書は残してゐるのではなからうか。模寫說が實踐的と言はれる時吾々は素朴的なる模寫說をばるかに越えたものがそこに意味されてゐることを氣付かしめられる。しかし「プロレタリアートの世界觀を客觀化することが客觀的世界觀の法則を抽象し分析する政治的實踐と同一である。此處に吾々の模寫說が成立する」と言はれるだけでは私には尙その解明が十分には思はれる。何故なら私にとつて斯かる意味の模寫說の究明は

著者の意圖する唯物論的課題を覆へずに至りほしまいかとすら感ぜしめられるからである。併しこのやうな問題は何れ眞摯なる氏の今後の努力が解明してくれるであらうことを信じて疑はない。それは兎に角右の紹介に依つて大體察知されるであらう如く、この書は如何なる立場に立つ人と雖も、一讀されて然るべき好個の著作である。(政經書院發刊・定價參圓・酒井康彦)

## 雜 錄

### デイルタイの教育學(全集第九卷)

大學を出た青年が學校の教師になるとする。手に負へない悪童共にとりまかれ、彼等を指導、統御しなければならぬ。それは研究室の學問的な努力とは全く別の世界である。自分が黑板に向つて坐つた頃を回想し、習つた最もよき先生の模倣をする。だがそれでは新しい生活の種々な任務を果すことは出来ない。職務に嫌惡を感じ、出来れば、大學時代の研究を続けたいと思ふ。自分は學者であつて、教育家ではないと感じる。教師としての職務に少しも喜悅を見出さず、活動力を全く失つてしまふ。短い期間の訓練と些少な知識で、巧に兒童を扱ふ小學教師を羨望さへする。これでは教師としての職務は果されない。又こんな生活はその人の不幸である。

勿論、大學は特殊な、専門的な、學問的研究のなされるころである。それによつても、教師に要求される専門的知識は授けられるだらう。併し、それだけでは足りない。先づ第一に、全人格を教育家として作り上げることが必要である。語の固有な意味に於ける師範教育である。人の師たるやうに訓練することである。教育學の歴史と體系、それは大學としては是非授けねばならぬものである。併し、實際に於ては、この方面の努力は存外等閑に附せられてゐる。教育學の基礎をなす心理学と論理學とは勿論のことである。教育の歴史を通じて得られた經驗、經驗に基いて立てられた理論、教育學の主要命題、それらの知識は缺くことを許されない。教師としての知的準備には、教育制度と教育學說、特に近代のそれ、現代有力な教育論を習得しなければならない。

教育學の講義はデイルタイにとつて最も好ましいもの、一つであつた。又、彼はギムナージウムの教師としての經驗もある。教育學の基礎としての心理学には、獨自の見解をもつてゐる。教育學の講義には決して不用意ではないといつてゐる。既にパーセル時代、一八六八年教育學の講義を豫告して果さなかつたが、プルスラウ時代には、一八七四年の夏、七四―七五年の冬、七八―七九年の冬學期と前後三回に亘つて講じてゐる。ヘルリン時代には八四年の夏から九四年の夏學期まで、毎學年、夏には「教育學の歴史と體系」を、冬學期には心理学の講義の補足として「心理学の教育學への應用」を講じ、兩者は不可分の一つの全體をなしてゐた。